
ありがとう

ガッ君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありがとう

【Zコード】

Z3518D

【作者名】

ガッ君

【あらすじ】

ふつうの生活から一転彼女の生活はどうなるのだろうか。父親と娘の物語

(前書き)

はじめて書いた小説で改行などはほとんどないのに読みにく
いとは思いますが、どう承下せよ。

「お父さん、長い間ありがと。そしてこれからもよろしくね。」と娘の香織は涙ながら手紙をよんでもくれた。そう、香織は今日新たな道へと踏み出したのだ。白いウェディングドレスを着て手を震わしながらも私に手紙を読んでくれた。さかのぼること7年前あれはとても暑い夏の日

「行つてきまーす。」と元気良く自転車に乗り学校に向かつた香織。そのとき何か背筋がゾッとした。そのときは特に気にせず香織を見送った。やはりイヤは予感は的中した。

いつもどおり夕方には部活でヘトヘトになつて帰つてくるはずなのだが、日が落ちた20時になつても香織は帰つてこない。おかしいと思い私は家を出た。家から学校までは自転車で40分と少し遠い。さらに家は山の上で人気も少ない場所にある。車を走らせ10分道路につづくまつてゐる香織を発見。香織は体を震わせながら泣いていた。この子は生まれつき視力が悪く球技もできない目であった。さらに暗い所では急激に視力が低下するのであつた。その日はいつもより部活が遅くなり暗い道を帰つていたため周りが見えなくなつてしまつてたのである。香織を車に乗せ家に帰つた。この出来事は初めてではなかつた。香織が中学に入り帰りが遅くなると家にたどり着けないことはよくあつた。香織は

「お父さんには心配かけたくないから。」青春の真っ直中、恋愛や友達と一緒に会話しながら下校するのも楽しみの一つかなと思いつつくりした。そう香織は暗いところだけじゃなく明るいところでも目が見えなくなつたのである。私はテレビをつけて香織に言つた。

「お父さん、まだ家ついてないの？」その言葉を聞いた時、私はびっくりした。そう香織は暗いところだけじゃなく明るいところでも

「家についてるよ。ほら、テレビでお笑いやつてるじゃんか。」香織は言った。

「うん、声でわかった。でも、テレビ見えない。」そこで私は香織が失明したことに気づいた。それから夜間の病院に車を走らせた。

診断結果は

「はつきりわからないので後日眼科で見てもらつて下さい。」とのこと。帰りの車の中は重い空気が漂つ。重い口を開く香織。

「お父さん、どうしたら視力上がるんだろうね。」私は返す言葉がなく香織を抱きしめた。翌日、眼科に行くと原因がわかつた。

「この子は精神的にきてましたね。たぶんそれがちょうど暗い日と重なり目が見えない不安からショックを受けたようです。」とのこと。香織には診断結果は伝えませんでした。医師が言つにはまだ若いし精神的に落ち着いてきたら見えてくることもあるとのこと。で私はそれを信じじむことにした。香織は学校を休ませ私も仕事を休む日々。

香織の目は全く変わらず過ぎていく日々。

半年がたち最近は点字を覚えたり一緒に外に出かけたりとできるようになった。

しかし、1ヶ月前までは朝から晩まで部屋にこもり泣いていた。

親として私は何をしていいかわからず私はいろいろ調べた。

とある本屋に立ち寄った際に『失明からの転機』という本をみつけた。

それは交通事故によつて両目の視力を失つた一人の男性が書いた本であった。

1ページ1ページ点字と日本語で書いてあつた。

その人も香織とどうよつ急に視力をなくしたそつだ。彼はそれを克服し今は作家として毎日を過ごしているそつだ。すぐさまこの本を買って帰り1行ずつ香織に点字を触れさせながら読ませた。香織は泣きながらその本を読んでいた。それからだ。香織は目が見えなくとも生きていくことができる。ピアノを習い始めた。学校

は盲学校へ転校させ毎間は昔の通り学校へ夜は家でピアノのレッスンと大忙しだ。

香織が失明してもう1年と半年がたつた頃香織は点字を全て覚え学校の教科書を私に読んでくれた。

私は涙をふきながら聞いていた。

失明の原因は私にあるのに香織は誰も恨まず自分の目をまた見えるようになると小さなことから努力していたのである。

私が知らない間にピアノもうまくなり作詞・作曲もできるようになっていた。

高校に入学した年の私の誕生日の日には曲をプレゼントしてくれた。もちろん作詞作曲は香織。題は『世界は一つ』。お父さん顔を上げてごらん私はここにいます。暗闇の中で羽ばたく私。右も左もわからず泣いていたあのころ。母の命を預かり生きてきた私。重かつた怖がつた。つらかった。泣きたいときは泣けばいい。我慢はいらない。自分には正直になれ。の言葉身にしみている。

お父さん顔を上げてごらん。私はここにいます。暗い世界、明るい世界全く別物であるが私は同じ。世界は一つ。お父さんありがとう。これからも迷惑かけます。元気にして。という歌を香織は歌つてくれた。もう涙が止まらなかつた。香織はその日にもう一言話した。

「お父さんとキャッチボールがしたい。」と。女の子である香織は野球というものに興味はなかつたはずだがボールをとるということがしたかつたらしい。田の見えない香織には不可能なことであつた。私はそのとき

「いずれ2人で野球できる日は来るよ。」と言つた。香織は

「きっとね。」と笑顔で返した。16歳の夜だつた。誕生日が過ぎて2ヶ月が過ぎた頃、香織の帰りが1時間くらい遅くなつてきた。しかし、私の不安とは逆に毎日ウキウキしている香織。最近は、何かを意識しているような感じ。そのときは私は気づいていなかつた。香織に彼氏がいることを。高一の体育祭の日いつもはギリギリまで

寝ている香織が1時間も早く起きてきた。何をするかと思えば「弁当、香織がつくる。」たまに一緒に料理はしていたが今日は一人で作るらしい。遠くから見ているとしつかり作っている。砂糖を舐めて

「甘い。塩じゃないし。」とか一人でボソボソ言いながら。私が「今日はどうしたの?」「と聞いても

「別に。」と答えて包丁を動かしていた。出来上がった弁当箱は3つ。お父さんのと香織のとあと一つは?大好きな彼の分だったのだ。そこでやつと気づいた私。心中では嬉しい気持ちと何か宝を奪われたような苦しい気持ちとが入り交じっていた。私はとうさんに

「今日は見に行けない。弁当は仕事に持つて行くわ。」と言つてしまつた。香織はキヨトンとした顔でうなずいた。それからとくに休みになれば彼氏とデートと私は一人部屋の掃除に家事、洗濯の日々。つここの前までは

「お父さん、お父さん。」と寄つてきてたのにやつぱり香織も女子だなと思った。時はたち、香織は高校一年生になり進路を考えないといけない時期にきていた。私は目の見えない人でもできる」とを薦めた。しかし、香織は

「ピアノの先生か保育士がいい。」と言つた。始めは反対していた私であつたが香織の熱意に負け挑戦させてみた。それから香織は休みの日になると彼氏とは遊ばずピアノを弾いたり勉強したりと自分の夢に向かい一生懸命取り組んでいた。高校三年になり、保育科を希望した香織に絶望的な出来事が待っていた。それは担任からの一言だつた。

「入学できても目が見えないと保育士には慣れないんだよ。」とのこと。香織は自分の部屋で泣きじやくつていた。今回は私もどうしようもなく側についているだけであった。香織が生まれてきて始めて口にした言葉であつた。

「香織はなんで目が見えないの。なんで友達とバスケやバレーができないの。私なんか何もできないじゃん。生きてる意味ないし。」

私は今まで不満を溜めていたと思うと申し訳なかつた。それから香織は変わつてしまつた。部屋に引きこもり何もしない毎日友達、先生がきても会わないし話もししなかつた。高校三年にもなろうかとした頃、私は香織に話をした。「おまえにはいつかは話さないとと思つていた。香織はお母さんを知らないはずだ。写真では見たかもしないが現実の記憶はないはずだ。おまえのお母さんもね体が弱くて子供は産めませんって言われてたんだよ。それでも私の体はどうなつてもいいからつて子供を授かりたい。つて言つてたんだよ。それでね香織を授かつてお母さんの両親には産むことを反対されたわ。でも、お母さんはね、この子は私の命が宿つてるのおろすわけにはいかない。

といつもは優しいお母さんがあの時は怖かつた。でね、香織を産む日の3日前からお母さんは熱を出してねお母さんも香織も危ないつて言われててね容態も良くならずに香織の出産をしたのさ。香織がおなかから出てきたときはねお母さんも笑顔で迎えてくれてありがとう大きくなるのよつて言つてたよ。香織を抱きながら息を引き取つたんだ。お母さんは産めないと言われながらも香織をこゝつやつてこの世に送り出したんだよ。さあ、今度は香織の番だ。おまえはこのまま諦めるのか。やつてもいないので逃げ出すよつになれつてお母さんは教えたのかなあ？」と私は香織に話した。香織は真剣な目で私を見ながら聞いてくれた。次の日香織は言つた。

「私、保育士になるから。見といてよ。」

「ああ、やつてみ。結果はどおあれ必ずおまえのためにはなるから。」と私は返した。そして保育科に入学した香織成績もトップクラスで言つことなしではあつたがやはり田のことで不利であつた。しかし、保育科に入学した頃から香織の田には異変が。ある日の視力検査の時であつた。香織の口から

「右・左・・わかりません。下・上・・わかりません。」周りの友達は驚いた。もちろん香織もびっくり。今まで真っ暗だった視界にまた光が戻ってきたのだ。視力はまだまだ回復したわけじゃないけ

ど明らかに見えるようになつていった。その田家に帰ってきた香織から

「お父さん。保育士なれるかも。」との声。

「急にどうした?」と風呂を上がつてきたばかりの私は返した。

「髪ぐらい拭きなよ。ビショビショじゃん。」と香織。

「じめん。じめん。今、乾かすから。」とドライヤーを手に取ろうとしたとき私は気づいた。

「香織。おまえ見えるのか?お父さんの顔見えるのか?」と聞いた。

香織は

「まあね。はつきりはわからないけどね。」長かった。香織に視力が戻り始めたのだ。それから少しずつ香織は視力回復のため時間を費やし保育士の試験を受けるときには裸眼で左0・3と右0・5まで回復してきた。メガネやコンタクトをつけると左は0・5くらいまでしか上がらないが右は1・0まで見えるようになりぜんぜん支障もなくなってきた。とうとうこの時がやつてきた。香織の初仕事。夢は叶つた。保育士になれたのだ。

子供達と戯れ笑顔で過ごしている香織を見た私は言葉にできないくらい嬉しかった。香織も生活に不自由がなくなり一般的な生活を送れるようになつたこと。悲劇は起きた。私は仕事中倒れてしまつた。病院に運ばれた私を香織は先回りして待つていた。私は声を発せれなくなつていて。香織の声が小さく聞こえる。手の温もりは感じれていた。入院生活も半年が過ぎ私は話すこと聞くこともできなくなつていて。会話は手話や紙に書いて伝えていた。そのころよく私は香織に「結婚していい家庭をつくれよ。おまえの花嫁姿がみたいな。」と伝えていた。そう、私にはもう時間がなかつたのである。香織には伝えてはいなく医師にも

「言わないでくれ。」と伝えていた。それから3ヶ月後。私は息を引き取つた。香織が働き始めて二年が過ぎようとしていた頃であった。香織は泣いた。泣きまくつた。私は香織が元気なだけで嬉しかつた。唯一の心残りは香織のウェディングドレス姿を見れなかつた

ことだ。私が息を引き取つて1年後香織はあの弁当を作つてあげた
彼と永遠の愛を誓つた。香織は毎日、笑顔で過ごしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3518d/>

ありがとう

2010年10月17日04時29分発行